

《書評》

新谷好著

『英国世紀末文化とオスカー・ワイルド』

英宝社 2013年

浦部 尚志

嘗てのタイトストリート16番地にあった、ワイルド邸に掛かる丸いブラークの図柄がブックカバー中央にあしらわれ、かつ、世紀末を象徴する色のひとつ「董色」を基調とする表紙で覆われたこの本は、当協会の前副会長である新谷好先生が、これまでに発表なさった諸論文の一部を、「追手門学院大学研究成果助成制度」によって纏められたものである。「一部」とは言え、全4章(それらの章が各々3~4項に分けられ、全14項)・本文330頁からなる大著で、世紀末研究の基盤となる必須の知識を読者に広範に授けてくれる書となっている。そして、オスカー・ワイルドを主軸とし、幾つかの「キー」となるテーマに沿って英国世紀末文化の全体像の解明を試みている。

本書はまず第1章において、「19世紀末英国文化」の全体像の把握から始まる。――産業革命をいち早く推進し、「世界の工場」の名を欲しい俛にしたヴィクトリア朝英国は、その64年間に及ぶ治世において、「新しい価値観」が「伝統」を揺さぶった激動の時代であった。その間、社会・経済・文化において絶え間ない変化があったが、それらの事象は1890年代、即ち「ヴィクトリア朝末期＝世紀末」において、特に顕著となった。「新しい」という形容詞が頻繁に用いられたことから分かるように、時代は新奇なものを求める風潮に支配された。また、伝統的な人間観や男女観が崩れた結果、芸術家の関心は、否応なく人間の獣性や性の本質等への解明へと引

き寄せられた。それと呼応するかのようには、社会では、「切り裂きジャック」に代表される扇情的な事件や訴訟等が頻発した。悪名高き「ワイルド裁判」もその一例であった。

同章では、その後、世紀末の一大キーワードである「新しい女」という観点を手掛かりとして、世紀末の社会情勢の一端が語られる。即ち、「ヴィクトリア朝の女性と教育」に関する議論である。——19世紀末英国では、女性の高等教育と職業進出は、社会の伝統的価値観を覆すものとして「一部」で恐れられた。当時、「新しい女たち」は社会活動に関心を抱き、看護や教職等に多く就業するようになったが、実は、仕事と家庭を両立できた女性は依然、希少だったのである。

概括的な面から各論的な側面へと、本書は徐々に世紀末文化に関する論考を深めていく手法が取られているが、第2章において論じられるのは、主に「オスカー・ワイルドの恋愛、結婚、及びセクシュアリティ」である。——同性愛の罪で実刑判決を受けたワイルドほど、「同性愛者」の烙印を押された者は歴史上いないと言ってよいが、ここでは、彼が恋に落ちた女性たちに焦点を当て、彼の「性癖」が露にされる。オスカーを最初に同性愛行為へと導いた張本人と称されるロバート・ロスへの手紙の中で語られている、ワイルド自身の「ウラニアの愛」への関心は、彼のオックスフォード大学時代にまで遡れるのだが、ワイルドの初恋の女性が登場するのも同時期であることは注目に値するのである。

続いて「ワイルドが妻コンスタンスと結婚するに至る経緯とその後の破局」が詳述されるが、彼の「セクシュアリティ」が、ワイルドの文学、特に劇作品との関連において更に深く考察される。更に、彼と交流のあった有名女優や「新しい女」のモチーフ等との関連でワイルドの悲・喜劇の本質も鋭く切り込まれていく。そして、「ワイルドは「女性の権利」を主張する「新しい女」に取り囲まれていたと言っても過言ではないが、彼は母親ジェーンの女性観を踏襲している嫌いがある」という、著者の指摘は誠に意義深い。

第3章では、更に敷衍され、英国世紀末研究の重要テーマが各々分析されていく。——初めに「19世紀末の英国劇に登場する「新しい女」の項で

は、社会階級のカーストが未だ歴然と存在していた英国社会の中における女優の存在意義が概観される。「そして、女性の性と自立について並々ならぬ関心を示した19世紀末の男性劇作家は概して、性的に搾取されて男性に隷属する種類の「新しい女」を描いていた」という指摘も刺激的である。

「ピグマリオン物語の変容」の項に進むと、サロメやタンホイザーと並び、19世紀の芸術家の想像力を強く掻き立てた、ピグマリオンの物語の変容が綴られる。そして、「新しい女」が現れた19世紀末の英国社会では、男女の関係がより流動化したのが、「多くの芸術家が創作したピグマリオンの物語に登場するガラティア像には、当時の男性が理想とする女性の面影が投影されていたことも注目し値する」、とも語られている。

続いて考察されるのは、「絵画を代表とする装飾芸術とワイルドの関わり」である。——英国におけるジャポニスムは、ラファエロ前派の中世趣味、唯美主義運動、アーツ・アンド・クラフト運動等と融合しながら、実用的なデザインの日本の文物に注目が集まったことから始まった。そして、国民性や時代思潮や芸術運動と相まって花開いた英国のジャポニスムは、装飾品・建築・絵画・演劇等の幅広い分野に渡ってその刻印を残すこととなった。そして、唯美主義運動を唱導したワイルドは、絵画を作品の道具立てに多く使用した作家でもあった。『ドリアン・グレイの肖像』然り、『W・H氏の肖像』然り。ジャポニスムにも魅了された彼は、作品に日本趣味も多く取り込んだが、主にその傾倒ぶりを促したのは、同様に日本美術に憑かれていた画家ウィスラーからの影響だったのである。

オスカーは自ら「私はラファエロ前派に属している」と明言しているように、彼と「ラファエロ前派との関係」も無視できない。ワイルドがラファエロ前派の画家バーン＝ジョーンズと親しく交わったことは有名であるし、1891年にバーン＝ジョーンズの元を訪れたワイルドは、奇しくもそこで18歳当時のオーブリー・ビアズリーと出会い、親交を深め、後に『サロメ』の挿絵を彼に依頼することにまで至る。——このように、この項では、ワイルドが、「ラファエロ前派、ウィスラー、そしてジャポニスムに纏わる芸術運動」と分かれ難い関係にあったことが、丹念に論じられているのである。

最終章となる第4章の第1項においては、ワイルドがジャポニズムの初期の進展期に「アメリカ講演旅行に出かけ、唯美主義を喧伝したこと」と、その「講演内容」までが精査される。また、その中で彼がいかにジャポニズムを受容し、その後の文筆活動で体現していったかも考察される。そして、ワイルドがアメリカ旅行中に日本的装飾美の価値を認識し、その日本的な「活版術」にもどのくらい多大な関心を示したかという特異な視点が、この項の最後に掲げられる。

同章・第2項においては、いよいよワイルド「文学」の根幹を成すテーマが取り上げられる。——ワイルドは「芸術家としての批評家」の中で、「19世紀は歴史上の転換期で、それは全てダーウィンとルナン二人の業績である」と述べたが、これは彼の慧眼を示すものであった。何となれば、他の獣と同様に人間は本能に駆り立てられる生き物に過ぎないという、新しい人間観や宗教観が世紀末の頃までに既に芽生えていたからである。『ドリアン・グレイの肖像』においても主人公は、人生や美に対するこれまでの因習的な思想を一変させ、倒錯の世界へと耽溺する。マックス・ノルダウはこれらの現象を「ネオカトリックのヒステリー」と称して、ワイルドを英国デカダンスの代表と見なしたが、確かにワイルドには、カトリシズムに対する並々ならぬ関心があったのである。

またワイルドは、「社会主義下の人間の魂」の中で、人間が十全に生きるには新個人主義が不可欠であり、その新個人主義とは新ヘレニズムのことであると主張した。実は、ワイルドの著作に見られる社会批評や文明批判においては、この「新個人主義」や「新ヘレニズム」を看過してはならず、それらを醸成したのはワイルドが青春時代を過ごしたオックスフォード大学に源がある。つまり、ワイルド文学における「オックスフォード気質」の重要性が、ここで指摘されるのである。

続く同章・第3項では、「ワイルドの芸術至上主義」と「ヴィクトリア朝の性道徳と検閲」の問題に焦点が当てられる。2011年に『ドリアン・グレイの肖像』のタイプ原稿が史上初めて出版されて話題になったが、その中では同作品の当時の出版者が、同性愛を少しでも仄めかしていると見なされる箇所を悉く削除していった様が明確に見て取れる。またそこでは、作者であるワイルド自身も、「細心」の注意を払って、同作品の校正を行って

いたこともより明白となった。『サロメ』に関しても「検閲の問題」は重大で、サラ・ベルナルを主演としてリハーサルが2週間に渡って行われたにも関わらず、同戯曲は検閲制度に抵触して突如上演が禁止されるなど、芸術至上主義を貫こうとするワイルドは、当時の英国社会の偏狭な性道徳といつも闘わざるを得なかったのである。

さて、いよいよこの著書の最後を飾る同章・第4項においては、一転、ワイルドの周辺に華々しい彩りを添えた4人の女優の経歴が、ワイルドとの関わりを交えて語られる。——「生まれつきの道徳律反対論者」と自負したワイルドは、常軌を逸した振る舞いをする女優に非常な関心を示したが、ここで詳らかにされるのは、エドワード皇太子の愛人となったリリー・ラングトリー、建築家エドワード・ゴドウィンと駆け落ちしたエレン・テリー、英国の道徳律を無視したヒロインのサロメを演じそこなったサラ・ベルナル、そして、イブセン劇の過激な女主人公を演じたアメリカの女優エリザベス・ロビンスの四人についてである。これらの女優とワイルドの交友関係が、誠に波乱に満ちた興味深い逸話としてここで紹介され、この本の「結語」となっている。

この著書の概観は以上であるが、今回、何より痛感したのは、著者である新谷先生の豊富な知識と卓見であった。また、これほどの分量に及ぶ論考を纏められた、先生の真摯で丹念な研究ぶりにも頭が下がった。かつて故・平井博先生が著された名著、『オスカー・ワイルドの生涯』と『オスカー・ワイルド考』と同様に、これから世紀末研究を始めようとする諸氏には、新谷先生のこの本は必読の書、即ち、格好の入門書となるのではなかろうか。が、この本に対して全く不満が無いわけでもない。それは(新谷先生ご自身も述懐されているように)、実は、この本には、純粋に個々の「作品論」と呼べるものがひとつも存在しないことである。よって、ワイルドの作品論を纏めた先生の著作の出版が一刻も早く待たれる。特に新谷先生がお得意とされている筈の、ワイルドの劇作の分析を纏めた論考がこの先上梓されることを願って、ペンを置く。

《書評》

Dominic Janes,

*Oscar Wilde Prefigured:
Queer Fashioning and British Caricature, 1750-1900*

Chicago and London: University of Chicago Press, 2016.

大久保 譲

『モンティ・パイソン』第3シリーズの最終回(1973)に、「オスカー・ワイルド・スケッチ」という一幕がある。セピア色の街並みに、まず「ロンドン、1895」、続けて「ミスター・オスカー・ワイルドの邸宅」とキャプションが出る。場面は客間に変わって、オスカー・ワイルド(グレアム・チャップマン)が、プリンス・オブ・ウェールズ(テリー・ジョーンズ)を前に、ホイッスラー(ジョン・クリース)、そしてパーナード・ショー(マイケル・ペイリン)と、ノンセンスな「ウィット」を競い合う。

パイソンの作品として特段優れているわけでもないこのスケッチが、それでも興味を引くのは、ゲイであるチャップマンが、ワイルドを、というよりも、1890年代に数々の諷刺画の中でカリカチュアライズされたワイルドの姿を忠実に再現＝表象しているからだ。偽りの天才とナルシズムを示す金メッキしたスイセンを左手に、刹那的な身体の欲望を象徴するかのような葉巻を右手に持って、ワイルドというクイアな記号を己の身体でなぞるクイアな俳優。

しかしドミニク・ジェインズによれば、当のワイルド自身が、諷刺画に描かれた「ダンディ」のイメージをみずからの身体でなぞることによって、クイアな自己形成(queer fashioning)を行ったのだという。例えば1882年のアメリカ講演旅行で、ワイルドは、ギルバートとサリヴァンの『ペイシェンス』でパロディ化された唯美主義者のパロディを演じた。そして『ペイシェンス』もまた、ジョージ・デュ・モリアの描く唯美主義者のカリカチュ

アに触発された作品だった。「こうしたコピーと再発明のプロセスを通して、何十年にもわたって複数の意味が上書きされていったのである」(Janes, p. 229)。

ジェインズの、*Oscar Wilde Prefigured: Queer Fashioning and British Caricature, 1750-1900*は、時の有名人として(さらには「犯罪者」として)繰り返りかえし諷刺画に描かれたワイルドのイメージが、それ以前の諷刺画の歴史において形成されてきた「女々しい男 (effeminate man)」の図像や、そこに含まれるソドミーの暗示を受け継いでいることを指摘する。「ワイルドのイメージは、18世紀以降の猥雑な諷刺画の伝統によってあらかじめ形づくられ (prefigured)、そこではすでにダンディ的なパフォーマンスがソドミー的な欲望と関連づけられていたのだ」(p. 2)。

アラン・シンフィールドはかつて「ワイルド裁判までは、女々しさとホモセクシュアリティは、それ以降のようなやりかたでは結びついていなかった」(*The Wilde Century*, p. 4)と述べたが、ジェインズは、シンフィールドの著作の重要性を認めながらも、ワイルド裁判がソドミーと同性愛アイデンティティを結びつける決定的な契機となった、という考えを採らない。「1895年の一連のワイルド裁判は今日もよく知られているが、決してユニークなものではなかった。本書の第1部で取りあげる18世紀の裁判記録では、はっきりと、ソドミーが(過剰に)ファッショナブルな男性と結びつけられていた」(p. 16)。

ワイルド裁判こそ同性愛アイデンティティを形成する決定的な契機であったとする1990年代のクイア批評に対しては、21世紀以降の研究によってさまざまな観点から批判や修正が加えられてきた。ある程度は本書もその流れに棹さすものだと言えそうだ。とはいえ、ジェインズは実証的な歴史学の立場から初期のクイア批評を見直そうというのではない。テキストを重視してきた従来のクイア批評を補うために、視覚文化研究の方法論を導入しようというのがジェインズの主張である。なによりも「その名を口にすることができない」愛を表現してきたのは、言葉ではなく、身体的なパフォーマンスではなかったか。「法的・社会的な危険に身をさらすのはもちろんのこと、そもそもそれを表現する十分な言語を持たない文化においては、同性に対する欲望は、しばしば暗示的なジェスチャーや言葉遊

び、服装、ふるまいといったものの組み合わせを通して、暗号のようにして伝えられる必要があった」(p. 22)。こうした暗号化された微妙な身体言語を、(しばしば悪意ある)誇張によって、はっきり見える形で表現してくれるという点で、カリカチュアは貴重なのである。しかも、現実とカリカチュアの表現は一方的ではないことを、本書は何度も強調する。「イメージやステレオタイプは、クイアな人々によってだけ、あるいは諷刺画家によってだけ作られたものではなく、両者の相互交渉によって生まれた」(p. 228)。要するに、「クイアなパフォーマンスと同性愛嫌悪のカリカチュアとは、分かちがたく関連しあった現象なのである」(p. 231)。

こうしてジェインズは、18世紀後半以降のファッションブルな男性たちと、彼らの「女々しさ (male effeminacy)」を揶揄した諷刺画をたどり、そこに埋め込まれた同性愛的欲望／同性愛嫌悪を解説していく。

第2章では、グランド・ツアーに出かけて大陸ふうのファッションを身につけてきた「マカロニ (macaroni)」たち、とりわけホレス・ウォルポールとその友人たちが取りあげられ、舞台や諷刺画で彼らがどのように描かれたのかを論じる。「マカロニ」のひとりロバート・ジョーンズは、1772年、実際にソドミーで裁判にかけられ、フィレンツェに亡命することになる。「1895年のオスカー・ワイルド裁判は、ロバート・ジョーンズとそれを報じるメディアによって、予見されていた (prefigured) ののである」(p. 47)。第3章は18世紀後半のもうひとつの「女々しさ」のありかた、ヘンリー・マッケンジーの小説(1771)のタイトルを借りて「感情の人 (man of feeling)」の図像学だ。ジョウゼフ・ライト・オブ・ダービー描くサー・ブルック・ブースビーの有名な肖像画の分析から、ルソーとも親交のあったこの人物のセクシュアリティの曖昧さ(ベネディクト・ニコルソンは彼を「18世紀のオスカー・ワイルド」と呼んだ)を読みとっていく。感受性と共感の時代とはいえ「男の感傷性は、行きすぎると、一種の感情面での異性装とみなされた。伝統的な女性の涙もろさが模倣されているのだと」(p. 67)。第4章で18世紀前半を総括し、第1部は終わる。

第2部は第5章、摂政時代の「ダンディ」の分析から始まる。ポー・ブランメルに代表されるダンディは、前世紀のマカロニとは異なり、節度ある服装をよしとしたが、その「自己への配慮」もまた、女々しさのひとつの

表れと疑われる。身づくろいに余念がないダンディたちは、服装を除けば女性と区別がつかない身体を持つ存在として描かれた。折しもカリカチュアの全盛時代、アイザック・ロバートとジョージのクルックシャンク兄弟は頻繁にダンディを題材にしたが、彼らの諷刺には「恐怖と嫌悪だけでなく、それに強く惹かれる気持ちも含まれていた」(p. 119)という。第6章「バイロン主義者たち」の主題は19世紀前半のダンディたち、特にロード・ブルームと若き日のディズレーリ、そしてブルワー＝リットンである。前時代のダンディ表象を受け継いだ諷刺画の中で、彼らが「女性化」されていた経緯が論じられる。

ヴィクトリア時代後期を扱った第3部の中心がオスカー・ワイルドである。第8章は主にキャリア前半の、唯美主義者としてのワイルドを扱う。デュ・モーリアの諷刺画や『ペイシェンス』のワイルド像は、これまで検討してきた「マカロニ」や「ダンディ」のイメージに多くを負い、一方でワイルド本人も積極的にバイロンの「ダンディ」「天才」のポーズを利用していたことが確認される。第9章では1890年代、「男らしい」新しい女に対して、「女々しい」新しい男が『パンチ』などの諷刺画に登場したことが指摘される。同じころ、若い男性の取り巻きを連れ歩くようになったワイルドに、一度は下火になっていた諷刺が再び向けられ始めた。こうした文脈を踏まえ、裁判前後のワイルド像、とりわけオーブリー・ピアズリーとマックス・ピアボーム——それぞれが、やはり曖昧なセクシュアリティの持ち主である——の手になるカリカチュアが読みとかれる。

ワイルドの視覚表象には18世紀以来のカリカチュアの伝統が影響を与えている、という本書の主張の骨格はいたってシンプルだ。とはいえ、それを裏づける豊富な図像とその解釈、ここでは省略した派生的な議論(ボクシング選手の身体の意味、東洋と「女々しさ」の関係など)の面白さもあって、非常に読みごたえのある研究になっている。

ちなみにジェインズは、本書に先立って、併せて読まれるべき2冊の著書を上梓している。まず *Picturing the Closet: Male Secrecy and Homosexual Visibility in Britain* (Oxford University Press, 2015)。イヴ・コゾフスキー・セジウィック『クローゼットの認識論』(1990)を前提に、同性への欲望が視覚文化においてどのように表現(あるいは抑圧)されてきたかを、ホガー

スとエドモンド・バークに始まり、セシル・ビートンやデレク・ジャーマンまで俎上に載せて分析されている。当然、*Oscar Wilde Prefigured*の議論と重なりつつ、20世紀以降も射程におさめている点で、ジェインズの現時点での主著と言えるだろう。もう1冊は同性愛アイデンティティとキリスト教の「殉教」概念との関係を吟味した *Visions of Queer Martyrdom from John Henry Newman to Derek Jarman* (University of Chicago Press, 2015) である。同書の第5章“Saint Oscar”は、*Oscar Wilde Prefigured*とは全く異なるアプローチのユニークなオスカー・ワイルド論だった。クイアな視覚文化論の書き手として、今後も注目したい。